

「浅茅が宿」の舞台
—岡本綺堂・食満南北・川口松太郎・円地文子—

出口逸平

Four Plays Based on *Asaji ga Yado* by UEDA Akinari.
—OKAMOTO Kido, KEMA Nanboku, KAWAGUCHI Matsutaro, ENCHI Fumiko—

DEGUCHI Itsuhei

「浅茅が宿」の舞台

—岡本綺堂・食満南北・川口松太郎・円地文子—

出口 逸 平

Four Plays Based on *Asaji ga Yado* by UEDA Akinari.
—OKAMOTO Kido, KEMA Nanboku, KAWAGUCHI Matsutaro, ENCHI Fumiko—

DEGUCHI Itsuhei

上田秋成の『雨月物語』（1776年初版）は怪異小説の古典として、近代の小説や演劇に大きな影響を与えている。なかでも打ち続く戦乱を背景に、夫婦の情愛を描いた「浅茅が宿」は、巻末の関連作品年表にあげたように舞台化されたものだけで二十作を越える。

今回はそのなかから戦前・戦後を代表する「浅茅が宿」の4つの戯曲を取り上げ、とくに勝四郎と宮木の人物像に焦点をしばって探ってみたい。

1 岡本綺堂「増補 雨月物語」（二幕）

まずは原作の上田秋成「浅茅が宿」の内容を見ておく。15世紀中頃、勝四郎は下総国真間の豊かな百姓であったが、「物にかかはらぬ性」^{さが} ⁽¹⁾ ゆえ農作を厭い、家は没落する。一攫千金を夢見た彼は、妻宮木の諫めも聞かず、「かへるは此の秋なるべし。心づよく待ち給へ」と言い残して京に赴く。

ところが関東に戦乱が勃発して、約束の秋になっても夫は戻らない。宮木は「世とともに憑みなき人心かなと、恨みかなし」むが、家に籠ってひたすら夫の帰りを待つ。勝四郎も戦乱の噂を聞いてすぐに故郷に戻ろうとするが、木曾で盗人に荷物を奪われ、「家も兵火にや亡びなん。妻も世に生てあらじ。しからば古郷^{ふるさと}とても鬼のすむ所なり」と早合点して京に戻る途中で、熱病に倒れる。しかし知人に助けられ、周囲からその「揉ざるに直き志^{ため}」を認められ、彼は畿内で七年の日々を過ごす。

しかし京近くにも戦乱が迫り、彼は「古郷に捨てし人の消息だにしらで、萱草^{せうそこ}おひぬる^{わすれぐさ}」

野方に長々しき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を」と後悔して、帰郷の途につく。

真間の里は荒れ果てていたが、わが家では宮木が待っていた。二人はこれまでの経緯を語り合い一夜を過ごしたが、翌朝勝四郎が目をさますと宮木の姿は消えていた。彼は妻の「さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命を」の一首を見つけ、里人の漆間の翁から宮木がすでに病死していたことを知らされる。翁は「必ず烈婦の魂の来り給ひて、旧しき恨みを聞え給ふなるべし」「此の亡人の心は昔の手児女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」と宮木の死を嘆き悲しんだ一。

1913（大正二）年『演藝画報』3月号に発表され、1916年10月に帝国劇場で初演された岡本綺堂（1872～1939）の戯曲「増補 雨月物語」は、のちに「浅茅が宿」と改題される通り、下巻はもっぱら秋成の「浅茅が宿」に材を取り、そこに綺堂オリジナルの上巻を合わせた二幕構成となっている。

上巻では、戦乱の京大坂を逃れた勝四郎は、大内氏の城下長門国赤間ヶ関に辿り着き、そこで一度は享楽の色里に酔いしれる。ところが陶晴賢の謀反と悲惨な殺戮の現場に出くわして、急に望郷の念に駆られる。

旅から旅をさまよって、其日その日をうかうか暮らしてゐたが、どこへ行つても修羅の巷には飽き果てた。さつきの歌占の言うたに嘘はない。遠い故郷にはわしを待つている人があるのだ⁽²⁾。

秋成の原作では、「まのあたりなるさへ偽おほき世説なるを、ましてしら雲の八重に隔たりし国ならば、心も心ならず」と戦乱の噂を聞くやいなや、取る物もとりあえず妻の元へ戻ろうとする実直な田舎者として勝四郎は描かれている。ところが本作の勝四郎は、なじみの遊女をもつ「色男」、いかにも世慣れた「気軽さうな男」であり⁽³⁾、身近に迫った死の恐怖からようやく故郷の妻を思い出したにすぎない。原作が地味な展開ゆえ、遊女との交遊の場や荒々しい戦闘場面を加えて、舞台上に変化をつけようとした劇作家の苦心はうかがえるが⁽⁴⁾、その結果勝四郎が不実で軽薄な男に見えることもたしかである。

じっさい下巻では、勝四郎自ら「女房、堪忍してくれ。故郷のこともお前のことも、実は今まで忘れていたのだ」と懺悔している。この率直すぎる告白は、原作の「揉ざるに直き志」に通じる点はあるが、故郷に残した妻の消息を探ろうとしなかった自分の「物にかかはらぬ性」の欠点を、「信なき己が心」と責める原作の痛切な後悔の念はすっぽりと抜け落ちており、ただの自己弁護にしか聞こえない⁽⁵⁾。

にもかかわらずこの身勝手な勝四郎に対し、妻宮木は「悲しいわかれも人の世の、逃れぬ

定めと諦めて、泣いて送つた女房を、おまへは忘れてみなされたか」と泣いて訴えはするもの、「たとひ一旦は忘れられても、かうして帰つて来てくだされば、今まで生きてみた甲斐もある」とすぐに事情を飲み込んで夫を許す。原作では『万葉集』の手て兄こな女伝説⁽⁶⁾とともに語られる宮木の「烈さかしめ婦」の一面、すなわち夫に裏切られた「矢や武たけ」な女性の「長き恨み」が、本作ではほとんど消し飛んでしまう。

このように本作は歓楽と戦乱の時代相を舞台上に描き出しはしたものの、肝心の人物造型において原作の男女がもつ陰影を見失い、「時代に翻弄された貞女の悲劇」という平板な恋愛劇のパターンに収まってしまったといわざるをえない。

2 食満南北「浅茅ヶ宿」(一幕)

食け満ま南なん北ぼく (1880～1957) は1929(昭和四)年9月、大阪中座で「浅茅ヶ宿」を上演した。一幕三場の舞踊劇で、最初は勝四郎が都に出立する場、次に七年後の帰郷の場となり、最後はその翌朝の場面となる。大筋は原作に則つたものだが、特徴は再会の宴の最後に、宮木の狂乱ぶりが演じられる点にある。

勝四郎 コレコレもうその恨みはよしてくれ。サアわしも故郷の土の上。

へままよ手古奈よ、其かつしかに、真ま木きのはかげか松が根恋し、こひしこひしのこのふるさとに、浮世知らずの八幡の森よ、いづれわたりにその舟橋の、サツサ舟橋わたりに舟よ、サツサ舟はし、わたりに舟よ。

ト、勝四郎酔しれて踊り狂ひ寝てしまふ。

物凄く、

宮木 アア、やつぱりまことは梨の園。

へアラ恨めしの我つま夫まや、妻の恋しさくみもせで、さりともと思ふ心にはかられて、世にもけふ迄生ける命か。

ト、引ぬき、白地の着附かみもおどろになり。

へ二世の赤縄もこれまでぞ、何を那須野の薄紙に古びて文字もむら消ゆる水向けさへもうすらひのとけてあとなく、

ト、大ドロドロになり。

— 【暗転】 — ⁽⁷⁾

宮木は「まことは梨(筆者注一無し)」「恨めしの我つま夫まや、妻の恋しさくみもせで」「二世の赤縄(筆者注一「夫婦は二世の縁」)もこれまでぞ」と不実な夫をなじって恨みを募らせ、

ついには「大ドロドロ」（怪異の出現を告げる下座音楽）のなか、「引ぬき、白地の着附かみもおどろになり」と怨霊の姿となって勝四郎にまさにとりつかんとするところで、暗転となる。こうした宮木の「恨み」のストレートな表出は、秋成原作では宮木の歌に暗示されているものの、ほかの3作品にはほとんど見られない。

本作ではさらに最後の場面で、次のような勝四郎の狂乱のさままで描かれる。

勝四郎 宮木ゆるしてくれ

へ真間の手古奈のふるごとにあらぬこの世の恋ごろも、恋にやつれし面影のこひし、われは（筆者注—「われを」の誤りか）忘れし情なの男心ぞうらめしき、巫山の雲か漢宮の、そのまぼろしの夢の夢—。

宮木、宮木。

へ狂ひ狂ひて又もとの真間にはならぬ世のつぎはしや、あなたへひらり、こなたへひらり、秋の胡蝶が秋のすすきかるかやふみしだき、宮木恋しや、手古奈のむかし昔こひしや、恋ごろも、気もくるはしく追ふて行く。

「宮木恋しや、手古奈のむかし昔こひしや、恋ごろも、気もくるはしく追ふて行く」と宮木に伝説の女性手古奈を重ねあわせ、妻への恋心が過熱して狂乱の振りとなる。こうした大胆な感情表出は、まさに幻想的な舞踊劇ならではの表現といえることができよう。時代背景などリアルな歴史的要素を組みこんだ岡本作品と、男女の恋愛心理をロマンチックに歌い上げた食満作品は、その意味で好対照をなしている。

ただしこの男女の狂乱は、あくまで従来の舞踊の「狂乱もの」の枠内にとどまり、原作の宮木と勝四郎がもつ二面性（宮木における恋慕と怨恨の情、勝四郎における素直さと軽薄さ）に比べ、表面的な印象を与える点はいなめない。

3 川口松太郎「雨月物語」（三幕八場）

川口松太郎（1899～1985）は1953（昭和二十八）年5月公開の映画「雨月物語」（溝口健二監督 川口松太郎構成 依田義賢脚本）に先立ち、原案となる小説を雑誌『オール読物』（同年1月号）に載せた⁽⁸⁾。それを改めて戯曲に仕立て直し、1955年11月に新派が明治座で上演した作品が戯曲「雨月物語」（三幕八場）である。

序幕は「琵琶湖畔」と「大溝の市」の二場、二幕目は「若狭屋敷」「海津港の船遊女」「再び若狭屋敷」「朽ち果てた若狭屋敷」の四場、大詰は「源十郎の家」「宮木の墓」の二場で構成される。川口の小説にしる映画「雨月物語」にしる、秋成の原作とはおおきく異なる点が

あり、それが本作でも踏襲されている。

その第一の特徴は、秋成の原作には登場しない藤兵衛・阿浜という夫婦を設定した点である。武士となって立身出世を願った藤兵衛は、二幕目第二場「海津港の船遊女」で、足軽に乱暴され遊女となった妻阿浜に再会する。「女一人がうろついていれば、ころされるか売られるか、判り切っているくせに、お前のその鎧のお蔭で私はこんな体になった」とののしられた藤兵衛は、鎧や太刀を投げ捨てて阿浜に詫び、一緒に実家に戻っていく⁽⁹⁾。物静かで寂しげな勝四郎・宮木の夫婦に、たくましくコミカルな藤兵衛・阿浜夫婦を配し、静と動の対比をねらったものといえる。

第二の特徴は、「浅茅が宿」の筋立てを基本にしつつ、そこにあらたに秋成の「蛇性の姪」^{じやせいのいん}を組み込んだ点にある。すなわち宮木の許を離れた源十郎（原作「浅茅が宿」では勝四郎）は、高貴な姫君若狭（原作「蛇性の姪」では真名児^{まなご}）に出会い、身も心も奪われてしまう。というのも若狭が、綺堂作品の遊女とは全く別の「美のミュージズ」として登場するからである。

若狭様は、私の心の底にひそむあこがれの面影にそっくりです。私には妻がいます。夫婦仲も睦まじく、子供も一人あって、何一つ不足はない癖に、それでいて何時も何かの影を追いかけているのです。心の求める人の影が絶え間なくつきまとして、消えたことはありません⁽¹⁰⁾

「私は若狭にめぐりあって初めて人の幸福を知った。人を愛する本当の情を知った。若狭は私の心の奥深くに一筋の光りを与えたのだ。土をこね葉をかけ美しい器を作りながら、然し、それだけでは物足りない心地が何時もしていた。形を作り、色を塗るだけなら誰にでも出来るが魂を打ち込める者は何処にもいない。若狭に会ってからの私は、新しい魂の芽生えを感じず」と滔々と物語る源十郎は、「年経たる蛇^{おろち}」という真名児の正体を知って逃げまどう「蛇性の姪」の豊雄とは対照的に、静かに消えゆく若狭の死霊に「別れはせぬ、どこまでも追ってゆくぞ」とすがって、ついに昏倒する⁽¹¹⁾。

悄然と故郷に戻った彼は、宮木に会っても若狭が忘れられず「一人の私はお前の貞節を求めているのに、もう一人の私はお前が悪魔になれと祈っているのだ」と告げる。そして宮木の亡くなった日が、若狭に初めて出会った日だと知った彼は、思わず「若狭が宮木なのだ」と叫んでしまう。

初代水谷八重子の一人二役でこそ成り立つ趣向だが、二人とも身勝手な源十郎をまったく恨まず、若狭はただ「土へ返へるのです」と語り、宮木は土産の小袖を嬉しげに身に纏い、姿を消す⁽¹²⁾。

それに対し、「どれほど貞節な女房を持っていても、目の前の美しさに心を惹かれるのが男だ。古い朽ちてはならぬぞ。お前は立派な女房だ。非の打ちどころもない女房だが、そ

れだけでは満足しないのも男だよ」と語る源十郎には、男性としてまた芸術家としての強烈なエゴイズムを感じないわけにはいかない。

なるほど源十郎に一人の芸術家を見出した川口の着想は面白いが、そのエゴイズムを強調するあまり、「浅茅が宿」の宮木や「蛇性の姪」の真名児が持つ女性の両義的価値（宮木のもつ貞節と怨恨の情、また真名児のもつ魅惑と恐怖）をさらりと捨て去ってしまった点はあらためて指摘しておきたい。

4 円地文子「浅茅ヶ宿」（三幕六場）

川口松太郎が勝四郎を中心に原作を書き換えたのに対し、円地文子（1905～1986）の「浅茅ヶ宿」（1959年8月 歌舞伎座）は宮木を軸に舞台化を試みている。

まず構成をみておくと、第一幕第一場は勝四郎の出立の場、第三場は木曾で勝四郎が盗人に襲われる場面とともに原作に近いが、第二場には戦乱の最中に、村の焼き討ちを避けるため宮木が武将を接待する場面が挿入される。さらに第二幕では、近江の武佐に生き延びた勝四郎が神官の娘に心を寄せられ、故郷にもどる決心をする場面があらたに付け加えられる。第三幕は原作と同じく、亡霊の宮木との再会の場面である。

円地作品の特徴は、まず妻宮木の前身を遊女とした点にある。馴染み客の勝四郎に請われて妻となった彼女は、夫にも、親類縁者にもある種の引け目を感じていた。

私が娘のままでここへ来た女房だったら、決してあの人を一人旅へ出したりはやりません。でも、この家の身代の傾いたのも勝四郎どのが私を連れて来たためなどと親戚の方々から言はれてゐる身では無理に止めることも出来ないのですよ⁽¹³⁾。

しかし夫は彼女の貞節を信じた。だからこそなおさら彼女は潔癖であらねばならぬと強く決意していた。世間の通念に抗い、「遊女ゆえに操を守る」という自らの意思を最後まで貫く⁽¹⁴⁾。

そしてこの貞節に殉じる姿勢が結果として自害という悲劇を生んだというのが、円地の描く宮木像の第二の特徴である。

宮木さまはその時にはもう病み衰えて影のやうになっておいでなさいましたが、思はぬはづかしめを受けるのを厭ふてお寝間の梁に帯をかけてくびれてお死になさったのでございます。

元遊女ゆえに人々の偏見にさらされ、それゆえなおのこと潔癖さをつのらせ、最後は自害を選ぶに至った。こうした展開は、たしかに宮木の貞潔さをわかりやすく説明するという点では効果的だが、逆に原作の宮木がもつ、現実を越えた苛烈な純情さに、余りに通俗的な説明を与えることになってはいないだろうか。

さらに元遊女という設定は、彼女の「恨み」がほとんど描かれないという致命的な弱点をもたらす。たとえばト書きに「勝四郎が気づかぬ中に宮木はだんだん髪を乱し、この世を去った女の魂に残っている閨情を幽婉にあらはす」とあるが、その「恨み」はすぐに「とど、勝四郎の手をとって抱擁する」と回収されてしまう。

また本作の第二幕は神官の娘との恋模様を描いた場面だが、これは勝四郎が帰郷を決意するきっかけとなるに過ぎず、構成上不可欠な場面とはいえない。こうした冗漫さは第一幕の武将の接待の場面にも見られ、本作の魅力を減じている。

ここまで「浅茅が宿」を原作とする4つの戯曲を見てきたが、食満南北の「浅茅ヶ宿」を除く3作品には、勝四郎の「身勝手な」行動を肯定し、宮木を「従順な」妻として描くという共通した姿勢がうかがえる。

原作における勝四郎は「物にかかはらぬ^{さが}性」ゆえ家業を怠り、宮木との約束を反故にする反面、人々に愛される「揉^{ため}ざるに直き志」の面を持ち、宮木もまた貞節さ（「待つ」）と怨恨の情（「長き恨み」）を併せ持つというように、兩人とも善悪では割り切れぬ複雑な二面性もっている。秋成にはこうした人間の「内面」への深い洞察力が感じられるが、その点ではむしろ戦前・戦後の「浅茅が宿」の舞台の方が物足りない。

このような男性中心の視点でなく、男女間の深い断絶をドライな視点から斬り込んだ戯曲が別役実の「当世風 雨月物語」（円 2001年初演）であった。こうした現代演劇としての「浅茅が宿」受容については、稿をあらためて考えてみたい。

註

- (1) 上田秋成「浅茅が宿」「蛇性の姪」の引用は、『新編日本古典文学全集 78 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（1995年 小学館）による。以下すべて同じ。
- (2) 岡本綺堂の戯曲「増補 雨月物語」の引用は、『綺堂戯曲集』第四卷（1925年 春陽堂）所収の「浅茅が宿」による。ちなみに初出は「増補 雨月物語」の題名で、雑誌『演藝画報』1913年2月号に掲載された。なお引用に際しては、読みやすさを考えて漢字・振り仮名等は適宜書き改めた。以下すべて同じ。
- (3) ほかにも勝四郎は「ほんに気軽で面白いお人」「ほんにおどけたことばかり言ふお人」と評され

ている。

- (4) 1940(昭和十五)年6月の綺堂作「雨月物語」京都南座公演では上巻が削られ、下巻「下総国真間の里」のみの上演となったが、『大阪朝日新聞』6月13日では「こんどは浅茅が宿のみ勇敢に一刀両断して出したから枯々哀々の救いやうなき舞台(略)こんな難場を持たされた宗十郎(勝四郎役)こそお役目ご苦勞の次第(慈悲心鳥)と、下巻のみの舞台の起伏のなさを嘆じている。
- (5) 「増補 雨月物語」の帝国劇場初演を評した竹の屋主人こと饗庭篁村は、「勝四郎は七年越し家も妻も忘れて下ノ関の遊女に浮かれて居たとは薄情過たり。是なら帰つて来たら宮木は怨霊となりて啖殺してやるがよし」(『東京朝日新聞』1916年10月8日)と評している。
- (6) 秋成原作では「此の里に真間の手兒女といふいと美しき娘子ありけり(中略)この里人はもとより、京の防人等、国の隣の人までも、言によせて恋ひ慕ばざるはなかりしを、手兒女物うき事に思ひ沈みつつ、おほくの人の心に報ひすとて、此の浦回の波に身を投じしことを、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみ給ひてかたり伝へし」と、『万葉集』巻九「勝鹿の真間の娘子を詠む歌一首併せて短歌」を踏まえてその伝説が語られている。
- (7) 食満南北の「浅茅ヶ宿」(一幕)の引用は、雑誌『道頓堀』1929年9月号による。以下すべて同じ。なお引用した一節は、秋成原作から「さらともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か」と「水向けの具物せし中に、木の端を削りたるに、那須野紙のいたふ古びて、文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり」の文辞を取り込んでいる。
- (8) 脚本家依田義賢は「上田秋成の作の『雨月物語』から、浅茅ヶ宿、邪性の姪、この二つをとりあげ、これにモーパッサンの短編『勲章をもらったぞ』を組み込んだもの。こうした構想を溝口さんはずいぶん前に私に話していた。それをプロットに構成したものを、川口松太郎氏が小説化し、紆余曲折の後に、この作に即しながら、原案についたのが、このシナリオです」(『年鑑代表シナリオ集 1953年版』三笠書房 1954年)と、映画「雨月物語」シナリオの複雑な制作経緯を説明している。
- (9) 川口の小説では「良人の姿を一目見て阿浜は、海津大崎の絶壁から身をおどらせて湖水に投げたのだ。花崗岩の断涯から湖底に深く沈み込むと死骸の浮かぬ言い伝えも古来名高い場所だった」と阿浜は投身自殺したようになっていたが、映画では「いくど死のうと思ったか判らないのに、もう一度会わなければ死に切れなかったんだよ、その心が憎らしい、憎らしい」と叫んで、生き抜くかたちで改められた。
- (10) 川口松太郎の戯曲「雨月物語」の引用は、早稲田大学演劇博物館所蔵の上演台本による。なお川口の小説の引用は『雨月物語』(桃源社 1954年)、映画「雨月物語」の引用は『依田義賢シナリオ集』(映人社 1978年)による。以下すべて同じ。
- (11) 小説では「蛇性の姪」に倣って、若狭が太刀を土産に源十郎を家に帰すことになっている。映画では「源十郎さまをどこへもやりたくない。ね、もうこの屋敷を捨てて、わたしのくにへ参りましょう」と黄泉の国に引き込もうとする若狭に対し、源十郎は太刀を振り回して抵抗する。
- (12) 映画では次のようなシーンがある。
- 右近 妻子がありながら、なぜ、契りを交された？
 源十郎 判らない、なぜこんな過ちを犯したのか
 右近 男は、一たんの過ちですもうが、女はすまぬ
 源十郎 許してくれ、わたしを、妻子のもとへ帰らせてくれ……
 (中略)
 若狭 わたしはこの世に生をうけ、恋の情けもしらず、世をさりました。それをあわれと

「浅茅が宿」の舞台

思ったこの乳母が、せめてただ一度、女らしい楽しみをさせてやろうと、わたしをつれて、さまよい出たのでございます。その思いが叶い、あなたのような好いお方と知り合せて、一生只一度の語らい。やっと思いをとげた喜びも、ほんの束の間のこと。今、お帰りなされては、もう二度と逢うことも叶いませぬ。源十郎さま、そんな恐しい心をおすて下さい。そしていつまでも……

乳母の右近が厳しく源十郎の過失を問い詰め、若狭が恋の喜びを知ったがゆえの苦悩を切々と訴える。いわば硬軟取り混ぜて、彼を引き留めようとするのである。

(13) 円地文子の戯曲「浅茅ヶ宿」の引用は、早稲田大学演劇博物館所蔵の上演台本による。以下すべて同じ。

(14) 第一幕第二場に、次のようなやりとりがある。

宮木 夫は私の操を信じて居ります。

村越 操を……（笑ふ）玉の腕は能く千人の枕に叶ふと詩にも歌ふてある。遊女上りのそなたに長い留守をあづけて、女の操を守らさうとはさてさて大気な男だ。

宮木 遊女ゆゑに操を守るといふこともございます。勝四郎の妻になって以来、私はあの人の外、男に見へやうとは思ひませぬ。

（中略）

宮木 （必死に）村越さま、宮木の操を守らせて下さいまし。あなたさまのお心に従へば私はその場でわが生命を絶ちます。その覚悟でこの家へあなたをお招きしたのでございます。

なお本稿は、平成三十年度塚本学院教育研究補助費に基づく研究成果である。

「浅茅が宿」関連作品年表			
年月	作品	作者・脚色者	事項 (劇場・劇団・雑誌ほか)
1776 (安永五)	読本『雨月物語』刊行	上田秋成	
1803 (享和三)	読本『安積沼』	山東京伝	
1803 (享和三)	読本『月氷奇縁』	曲亭馬琴	
1804 (文化元)	読本『優曇華物語』	山東京伝	
1806 (文化三)	読本『善知鳥安方忠義伝』	山東京伝	
1808 (文化五)	読本『雲妙間雨夜月』	曲亭馬琴	
1809 (文化六)	読本『本朝酔菩提』	山東京伝	
1822 (文政四)	読本『南総里見八犬伝』五編	曲亭馬琴	
1836 (天保七)	合巻『新編金瓶梅』第四編	曲亭馬琴	
1913 (大正二)・5	「増補雨月物語」	岡本綺堂	帝国劇場 (東京)
1916 (大正五)・10	「増補雨月物語」	岡本綺堂	帝国劇場 (東京) 再演
1920 (大正九)	小説『浅茅が宿』	平井晩村	『夫婦雛』(講談社) 所収
1923 (大正十二)・4	日舞『浅茅が宿』	香取仙之助作 杵屋佐吉作曲 花柳寿輔振付	有楽座 (東京) 柳桜会
1923 (大正十二) ~ 1924 (大正十三)	日本画『雨月物語絵巻』	玉村方久斗	「白峯」「吉備津の釜」「菊花の契」 「蛇性の姪」「青頭巾」「夢窓の鯉魚」 「仏法僧」「浅茅が宿」「貧福論」 の九巻からなる
1928 (昭和三)・2	「雨月物語」	岡本綺堂	中座 (大阪) 劇評一「大毎」「大朝」 (「増補雨月物語」を改題)
1929 (昭和三)・9	新舞踊『浅茅ヶ宿』一幕	食満南北脚色・演出	中座 (大阪)
1933 (昭和三)・7	「新雨月物語」二幕三場	大島多慶夫	角座 (大阪) 関西新派大合同
1935 (昭和三)・6	「浅茅が宿」	岡本綺堂	自治会館 (東京) 併優学校 (「雨月物語」を改題)
1936 (昭和三)・11	日舞『浅茅ヶ宿』		北陽演舞場 (大阪)
1940 (昭和三)・6	「雨月物語」	岡本綺堂	南座 (京都) 劇評一「日出」「大朝」
1948 (昭和三)・4	「浅茅が宿」	岡本綺堂	新橋演舞場 (東京)
1950 (昭和三)・9	「雨月物語」	小野晴通作・演出	帝国劇場 (東京) 宝塚歌劇雪組
1951 (昭和三)・8	小説『浅茅が宿』	岡田鯨彦	『宝石』同年9月号
1953 (昭和三)・1	小説『雨月物語』	川口松太郎 村山知義演出	『オール読物』1月号 のち『雨月物語』(1954 桃源社) に収録

「浅茅が宿」の舞台

1953 (昭和二十九)・4	映画「雨月物語」	溝口健二監督 川口松太郎構成 依田義賢脚色	大映京都
1955 (昭和三十)・8	「雨月物語」三幕六場	川口松太郎原作 知切光歳脚色 野淵昶演出	大阪歌舞伎座 (大阪)
1955 (昭和三十)・11	「雨月物語」三幕八場	川口松太郎作 村山知義演出	明治座 (東京) 新派
1959 (昭和三十四)・8	「浅茅ヶ宿」三幕六場	円地文子作 松浦竹夫演出	歌舞伎座 (東京)
1967 (昭和四十二)・1	NHKラジオ 日曜名作座 「浅茅が宿」	若城希伊子脚色	森繁久彌・加藤道子
1978 (昭和五十三)・7	「浅茅が宿」	石澤富子作 小林勝也演出	文学座アトリエ (東京) 文学座
1988 (昭和六十三)・9	「浅茅が宿」	石澤富子作 藤原新平演出	ぐるーぶ・えいとアトリエ (東京) ぐるーぶえいと
1988 (昭和六十三)・10	オペラ「浅茅ヶ宿」	円地文子台本 増本伎共子 オペラ 用台本・作曲	東京室内歌劇場 (東京)
1989 (平成元)・1	「新雨月物語」一幕七場	竹内勇太郎	朝日生命ホール (東京) 劇団古典芸術座
1989 (平成元)・7	「浅茅が宿」	野田市太郎作・演出	銀座みゆき館劇場 (東京) 劇団熊
1998 (平成十)・9	「浅茅が宿」	酒井澄夫作・演出	宝塚大劇場 (兵庫) 宝塚歌劇雪組
1998 (平成十)・10	ミュージカル「迷宮伝説 一雨月の愛一」	横山由和脚本 村井秀安演出	近鉄劇場 (大阪)
1998 (平成十)・11～12	「浅茅が宿 秋成幻想 (舞踊 詩)」	酒井澄夫作・演出	TAKARAZUKA1000days 劇場 (東京)
1998 (平成十)・12	浪曲「浅茅が宿」		国立文楽劇場 (大阪)
1999 (平成十一)・2	影絵芝居「雨月物語 浅茅が 宿」		新国立劇場小劇場 (東京) 劇団みんな座
1999 (平成十一)・3	「昭和雨月物語」		亀有名画座 (東京) 劇団水族館劇場
2001 (平成十三)・9	「当世風 雨月物語」	別役実作	紀伊国屋ホール (東京) 円
2002 (平成十四)・1	「雨月物語 - 浅茅が宿・菊花 の約 -」	金子剛造脚色 笠井賢一演出	鏡仙会能楽研究所 (東京) 天舞
2003 (平成十五)・8	小説「浅茅が宿」	橋本治	『小説すばる』同年9月号
2005 (平成十七)・9	「湖の秋」	長谷川孝治作 高岸末朝演出	俳優座劇場 (東京) 俳優座
2006 (平成十八)・7	小説『雨月物語』	青山真治	角川学芸出版
2008 (平成二十)・3	「笠原版 雨月物語～浅茅が 宿」	笠原茂朱	津軽伝承工芸館・こけし館 (青 森) 劇団夜行館